

月刊

いじろのとも

第十三卷

十月号

無自覚に悪をなす

日本では
社会のタガが
ゆるみきて
あらゆる人が
自らの
利益のために
悪をなしけり

性に飢えた女たち

携帯で
男を紹介
するからと
誘い出されて
殺された
女の性を
何とすべきや

人生を考え直して

みたい人は(一〇五)

空海『即身成仏義』解説(八)

〔四〕 - 1 六大総説』続き

因位(いんい)には、識と名づけ、果位には、智と謂(い)う。智、即ち覚なるが故に。梵音の

(ぼだぼうじ・以下 は梵字)は一字の転なり。

(ぼだ)をば覚と名づけ、(ぼうじ)をば智

と曰う。故に諸経の中に謂う所の (さん

みやくさんぼだい)とは、古くは遍知と翻(ほん)じ、

新たには等覚と訳す。覚・智の義、相渉(あいわた)

るが故に。この『経』に、識を号して覚とするこ

とは、強(こわ)きに從えて名を得。因果の別、本

末の異(い)まくのみ。この『経』の偈は、五仏の

三摩地(さんまじ)に約して、是の如くの説を作

(な)す。

参考までに、現代語訳を頼富本宏著『日本の仏典2

空海』(筑摩書房刊)の「即身成仏義」から、引用させて頂きます。

「 * * *

(この識について説明を加えると)、原因ともいうべき修行の段階では、「識」と呼び、結果にあたるさとの段階では、「智」という。なぜならば、「智」は、実に「覚」であるから。梵語の (ぼだぼうじ)は、同じ budh(さとる)という動詞の語根から派生した語である。そのうち、ブツダを「覚」と名づけ、ボーディを「智」というのである。

それゆえに、もろもろの経典中にあらわれるサムヤクサムボーディという語は、古い訳では「遍知」と漢訳され、新しい訳では「等覚」と漢訳されているのである。

これは、「覚る」と「知る」の意味が相通じあっているからである。

先に引用した『大日経』において、私は識つたとあるところを、さとつたとするのは、世界の本来生起しないことを知ることが重要であるから、さとつ

たと表現したのである。「識」と「覚」という相違が生じるのは、修行の段階か、さとの段階かという区別、あるいは(心の)本体か、心の現象かという異なりがあるにすぎない。

この『大日経』の偈文(げもん)は、大日如来をはじめとする五仏の瞑想の境地を要約して、以上のように説いたのである。

られた後、「こころ」の働きである「情動 感情機能」が統合されて発揮される智慧です。澄んだ鏡のように人のこころをありのままに写し出すことができる智慧・徳です。

平等性智（ひょうどうじょうち）は、法界体性智が得られた後、「からだ」の働きである「感覚 運動機能」が統合されて発揮される智慧です。自分の「からだ」とあらゆる他の存在とが平等一味であると感ずる智慧・徳です。

妙觀察智（みょうかんざうち）は、法界体性智が得られた後「あたま」の働きである「認知 言語機能」が統合されて発揮される智慧です。外界のあらゆる存在をあるがままに言語体系に位置づけて知る智慧・徳です。

成所作智（じょうそさち）は、法界体性智が得られた後、「たましい」の働きである「自我 人格機能」が統合されて発揮される智慧です。為すことあらゆることが、そのままに法にかなって成就する、という智慧・徳です。

なお、現代語訳に「『覚る』と『知る』の意味が相通じあっている」とありますが、これに接しますと、ソクラテスの「無知の知」が、まさに「覚」にあたっていることに、思い至ります。

自作詩短歌等選

弱者の譲歩

発展途上国代表

「貿易障壁となる

農業補助金は

削減すべきだ」

EU代表

「それは

内政干渉だ」

結局

「あらゆる

補助金を見直す」

と発展途上国が

譲歩して決着した

最後は

弱者が譲歩せざるを

得ないということ

法律制定の趣旨は無視

法律の

抜け道探し

得をせよ

そのため弁護士

雇わなければ

暴力の連鎖

無法者

止める暴力

いるけれど

誰が無法か

判断できず

互いに暴力

使いあう

米国の社会のひずみ

アメリカでは
貧富の差が開き
労働者と経営者とは
約四 倍の差がある
という

労働者は
平均年収二五 万円
経営者は
平均年収一 億円
経営者たちは
封建領主のように
会社を収奪し
農奴を飢えさせている

熾烈に失う子どもの命

中三も
焼身自殺
できる歳？
なぜかしれつに
失ういのち

不安をなくそう
障害者
社会で暮らす
喜びと
不安が混じる
グループホーム

都会で野菜作り

キューバでは
都会で
駐車場やごみ捨て場を
困って
堆肥や厩肥を混ぜた
土を入れ
野菜を作るといふ

その基礎には
国有地の無償貸与
私有地の貸借奨励策
農業指導員制度の確立
などがあり
バイオ農業や
ミミズを用いた
土作りの研究が
あるといふ

日本では

手始めに
前から
提案しているように
小・中学生に
全員土地を貸与し
野菜を作らせては
どうか

中国エリートの米国留学

中国の
エリートこそって
アメリカへ
日本留学
ぐっと減る

アメリカ社会の病理

毎年米国では
一五 万人の子どもが
行方不明になり
五万人の子が
誘拐されているという
でも
行方不明の大多数は
家出の少年少女であり
誘拐事件の九割は
養育権をめぐる
親の争いらしい
それにしても
これは
驚くべき数値で
アメリカ社会の
病理を示す
一つの指標だ

女性の中性化

若い女性が
仲間うちでは
「オレ」とか
「くだけ」とかいう
ことばを使うように
なっている
また
面倒なときは
「分かりません」を
頻発するという
ことばが中性化する
と同時に
コミュニケーションを
拒否する傾向がある
らしい
これも
他己を失って
来ているということ

自作随筆選

治安悪化の要因

九月二十八日の毎日新聞社説は「警察白書 治安回復は親身の対応から」と題して、最近の治安悪化の問題を取り上げていました。（なお、私は、『警察白書』をじかに読んでいませんので、ここに紹介しますデータや治安悪化の要因などの記述は、毎日新聞の社説からの引用になることを、お断りしておきます。）

新聞によりますと、この白書には、「我が国の治安回復に向けて」という特集が組まれているようです。つまり、警察も治安が悪化したことを認め、その対策を正面にすえて、取り上げているわけです。

まず、治安情勢の悪化の現状ですが、昨年中の刑法犯の認知件数は、274万件を超え、昨年に続いて新記録を更新したようです。この数字は、10年前に比べれば、100万件増えたことになっているとのこと。また、同様に10年前に比べて、窃盗犯（全犯罪の90%を占める）は1・5倍に、殺人、強盗、婦女暴行などの重要犯罪（凶悪犯罪）は2・1倍に、路上強盗とひったくり

は4倍前後に、それぞれ増えたと言います。

白書は、こうした犯罪多発の要因の一つとして、「社会の犯罪抑止機能の低下」を挙げています。つまり、「人々の規範意識が低下する一方、地域住民の連帯意識が薄れ、情報交換機能も低下していて、他人の生活への干渉を控える風潮も影響している」と指摘しているのです。

また、一方で、警察官の業務負担の増加も指摘しているようです。つまり、警察の手が足りなくなっており、増員がいるということです。

しかし、社説は、それはもつともなことだと思うが、警察官の不祥事や不手際が続き、人手を増やせば状況が好転するとは思えないと、述べています。そして、この社説を次のように結びます。少し長くなりますが、引用させていただきます。

まず、警察が思い切った改革を断行することだ。信頼される組織に生まれ変わらない限り、市民の協力は得られず、防犯対策は浸透しない。要は一人一人の警察官が市民の訴えを親身になつて聞き、悩みや痛みを自分のものとして対処することだ。治安の回復にはその積み重ねが不可欠だ。／先月就任した

同庁（警察庁）の佐藤英彦長官は「今警察が踏ん張れば、日本が誇る治安の良さを復活できる」と再三語っている。その言葉に望みを託し、全国の警察官の奮闘に期待したい。

この社説の見出しを思い出して頂きたいのですが、それは「治安回復は親身の対応から」というものでした。

ここに引用しました部分を読みますと、この社説を書いた方は、いま、これほどまでに乱れている治安を回復する道は、「警察官が市民の訴えを親身になつて聞き、悩みや痛みを自分のものとして対処すること」だとお考えのようです。

正直言って、驚きました。

私には、もつと大切だと思える点が全く無視されているのです。私は、警察官の対応で治安が回復するなどとは、まったく考えませんでした。でも、多くの人たちの発想は、大体がこうなるようです。

たとえば、家庭が崩壊しているから、親（夫婦）はもつと家庭を大切に思わなければならないとか、子どもの善悪の判断が狂ってきているから、親や先生はもつと正しいことは正しい、間違っていることは間違っていると、ちゃんと教えなければならないとか、多くの人にモラル

ハザードが起こっているので、もっと人倫を大切にし、道徳的にならなければならぬ、といった類の発想に基づいて問題解決策を立てるのです。

これは、まさに、対症療法と呼ばれるものだと思います。こうしたやり方は、いまの日本を見ていますと、いくらでも見つかるように思えます。たとえば、児童虐待が起こるから、児童虐待防止法を制定する、といったぐあいです。

対症療法的なやり方は、その現象が起こっている原因に対応するのではなく、その現象そのものを、何とか変えよう、あるいは無くしようと、法律などを作って対応するものです。病気にたとえていいますと、熱が出ているので、その発熱の原因は問わないで、解熱剤だけを投与するようなものです。病気がますます悪化するものは、必然です。

いまの日本は、アメリカ人が十年以上も前に指摘しましたように、「AXIOM（原理・原則）」を失っていますので、対策はいつもなまめく、あらゆる施策が対症療法的になっています。教育にしろ、政治にしろ、外交にしろ、経済にしろ、全ての施策がそうなっているのです。

この社説にもそれが歴然と見られるというわけです。

私に対策を立てると言われれば、私なら、「社会の犯罪抑止機能の低下」、つまり「人々の規範意識の低下」や「地域住民の連帯意識の希薄化」に、直接に対応する方策を立てます。

私の理論でいいますと、規範性の喪失は、他己の萎縮によって起こっているのです。

何度も述べてきましたから、もう耳に「たこ」ができておられるかも知れませんが、それは、自己追求制度である民主主義の流布・発展につれて、自己肥大が起こり、それに伴う信仰の喪失で、「他己」萎縮が起こっているからなのです。

ですから、対策は、この自己肥大を抑え、他己萎縮を回復する以外に有効なものはないのです。

まず、自己肥大を抑えるためには、例えば自己主張ばかりを教えている学校教育を是正し、自己主張を控えて、他者をたてることを教えなければなりません。次いで、他己萎縮を回復するために、子どもの時から、自分を超えた「大いなる力」に従順に従うことを教えていかなければならないのです。勿論、大人への啓蒙も要ります。

この道のりは遠いものです。日本に規範性を取り戻すには、うまくいっても五十年はかかるのではないのでしょうか。でも、今からでも始めなければなりません。

釈尊の「身口意」(一一六)

法句経解説

(三六一) 身について慎しむのは善い。ことばについて慎しむのは善い。心について慎しむのは善い。あらゆることについて慎しむのは善いことである。修行僧はあらゆることながらについて慎しみ、すべての苦しみから脱れる。

前節に続いて、慎しみの大切さについて述べています。前節は感覚器官についてのものでしたが、ここでは、もっと包括的に、「身」、「ことば」、「心」、「あらゆること」について、慎しむことは善いことである、と述べています。

身、ことば、心の三つについては、何度も出てきましたので、「記憶だと思えますが、これは、真言密教では、「身口意(しんくい)三密の加持」と言って、修行上でとても重視されています。本誌の四月号で空海『即身成仏義』を解説する中で、紹介いたしました。お持ちの方は、ご参照ください。

復習ですが、それは、手に印をむすび、口で真言をとえ、ここに本尊を観想するとき、無意識に宿っている

る如来と自己の生きる力とが統合され、衆生と本尊との合一を体験することができる、というものです。

この身口意は、私の「精神の心理学モデル」では、順に「からだ(感覚・運動)」「あたま(認知・言語)」「こころ(情動・感情)」にあたっています。モデルの意識領域にある、残りの「たましい(自我・人格)」は、この三つの精神機能領域のコントロール・センターの役割を果たすもので、実際の行動遂行に当たるのは、この三つの働きなのです。ですから、行動はすべてこの三つの領域に現れます。つまり、あらゆる悪も、あらゆる善も、この身口意の三つの行為(三業)を通じてなされるということなのです。ですから、この三業を慎しめば、あらゆることを慎しむことになっているわけです。

こうしてあらゆることを慎しめば、最後にありますように、「すべての苦しみから脱れる」ことができるのです。

現代人は、あらゆることを慎しむことが、すべての苦しみから脱れる道であるなどは考えないで、逆に、そのことが、苦を生み出すのだと考えるのではないかと思うのですが、それは、間違いです。

身口意を慎しみ、ひたすら修行するときだけ、人間は真の「大楽」に至れるのです。

(三六二) 手をつつしみ、足をつつしみ、ことばをつつしみ、最高につつしみ、内心に楽しみ、心を安定統一し、ひとり居て、満足している、その人を(修行僧)と呼ぶ。

なかなか難しい偈のように思われます。人生においてつつむことの大切なことは、前二つの偈で解説した通りですが、ここでは、「内心に楽しみ、心を安定統一し、ひとりで居て、満足している」と述べています。なかなか理解しにくいのではないのでしょうか。

勿論、完成された修行僧では、この偈のままでは間違いではないのですが、まだそこまで達していない人が、こうなるためには、順序を入れ換えなければなりません。つまり、戒律を守って身を清浄に保ち、「心を安定統一」することで、結果として「内心を楽しみ、ひとりで居て、満足している」ことができるようになるのです。

私がヨーガの師とした佐保田鶴治師は『ヨーガ入門』(池田書店刊)のカバーの内側に、ヨーガをすれば、たまたしいが救われて、生きる喜びが湧いてくる、と書いておられますが、それが、ここでいう「内心を楽しみ、満足している」ことに当たっているように思います。

残っています「ひとりで居て」満足している、ということですが、これは、なかなか難しいことです。

人間はおのれ自身を主張しようとする心の働きである「自己」と、他者を求め愛する心の働きである「他己」という二つの相矛盾する心をもっています。そして、後者の他己の心を持つことが、人間の人間たるゆえんをなしているのです。

ですから、人間として安心・安寧を得たいと思えば、他者ところを通わせあわなければなりません。

なのにここでは、ひとりで居て、満足している、とあります。なぜなのでしょう。

それは、他者を求め愛する心というときの他者は、根本的には、現実の人ではなく、自分の心に宿した如来だからです。ですから、それを求める人は、現実には他者が居らず、ひとりでも、淋しくなく、満足していられるのです。

しかし、それには、条件がいります。それは、自分の心を磨いて、自分の中の如来を実感できるようにしなければならぬということです。あるいは、それを強く信じて、決して疑われないことが必要なのです。そうすれば、ひとりで居ても、心に満足を感じることができるのです。かえってその方が、いらぬストレスがかからず、

心を乱されることがないので、いつそう強い満足が得られるのです。完成した修行僧には、自分を生きる人生はもう必要ないのですが、でも、他者の救済が残ります。そのためには、他者と接触しなければならぬのです。

(三六三) 口をつつしむ、思慮して語り、心が浮わつくことなく、事がらと真理とを明らかにする修行僧 かれの説くところはやさしく甘美である。

「口をつつしむ」と聞きますと、あの、子どもとよく遊んだ良寛さんを思い出します。口をつつしむべきことばは「戒語」と呼ばれますが、良寛さんは多くの戒語をあげています。何度か紹介したように思います。

現代の民主主義社会では、自分の判断が最優先されまですので、まず、自分を主張することが尊重されます。そうなりますと、口をつつしむどころか、どこまでも、いわば厚顔無恥に、相手を説得しなければなりません。そこに「思慮して語る」余裕はないのです。

例えば、いま、小学校では、先生の質問に積極的に手を挙げるのが奨励されています。たとえ分からなくても、まず手を挙げます。そして、先生に当てられて、答えが分からなければ、「忘れました」と言います。先生

もそれを叱りません。「もつとよく考えて(思慮して)手を挙げないさい」とは決して言わないのです。なぜなら、先生は、発言しようとする積極的態度はほめられてしかるべきだと、考えているからです。この偈も、現代の民主主義社会では、殆ど意味をもっていないように思えます。

その次に出てきます「心が浮わつくことなく、事がらと真理とを明らかにする」ことも同様です。

現代のように、すべての判断基準が自分の利益と選好になつていきますと、周囲の状況で常に自分の利益と選好が変化します。ですから、常にそれにつれて「心が浮わく」ことになつてしまうのです。そうなりますと、自分への執らわれがありますから、「事がらと真理とを明らかにする」ことは、不可能になるのです。

いま、政治をみていますと、いや、政治だけではありません、あらゆる分野にわたって、自分(あるいは自分の所属する集団)に執らわれて、状況がどうなつているのか(事がら)の判断がとても不的確ですし、ましてや真理など分かるはずもなくなつていきます。

ですから、現代では真の「やさしさ」は、失われてしまいました。たいていの僧侶の言葉さえも「やさしく甘美」ではなくなつてしまつていっているのです。

後記

一、秋も深まってきました。このところよく雨が降りますので、畑の草がどんどん伸びてきます。池も満水になっていきます。

二、九月には、畑にいろいろな野菜の種を蒔きました。大根、白菜、人参、ほうれん草、菊菜、玉葱等々。また、ワケギ、ニンニク、ジャガイモ、などの球根や種芋を植えました。いま、大豆、里芋、さつまいも、などが収穫を待っています。どれも、最近の雨のせい、活き活きとしてよくできています。

三、一年半前の昨年の三月号で「行動予測の困難さ」という随筆を載せました。また、後記でもそのことに少し触れました。今、それを読み直してみました。その中には、「テロ行為なども含めて、何が起こるかが予測できない状態になっている」ことや、敏腕なFRB会長のグリーンズパン氏にしても、もはやアメリカ経済が統治（ガヴァナンス）不能に陥りつつある、という点などを指摘していました。

四、周知の通り、アメリカで、誰もが予測困難なテロ行為が、私がああ随筆で指摘した通りに、それを書いた六カ月後の九月に、不幸にも起きてしまいました。五、また、アメリカの株価は、あれからほとんど値下

がりしています。また、これもアメリカ人の誰もが予測できなかった、大企業の不正経理が発覚しました。そして、私の予測通りに、景気はだんだんと、不幸にも悪くなって来ています。

六、そのあたりを受けていることもあるでしょうが、日本もますますデフレが深刻化しています。政府や日銀の陳腐な政策では、もうとても收拾がつかない状態に陥りつつあります。でも、総理側近をはじめ、経済閣僚などの話を聞いていますと、その認識はないうです。

七、世界的に行動予測の困難性は高まるばかりです。わが日本でも、大混乱が起こらないことを祈るばかりです。

月刊 こころのとも 第十三巻 十月号 (通巻 一五四号)	平成十四年十月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひびきのさと）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

